地域連携調査「丸木位里と故郷飯室をつなぐ」プロジェクト報告

多田羅　多起子

はじめに

広島市安佐北区安佐町飯室は、画家・丸木位里（一九〇一～九五）の出身地である。本稿では、飯室の地域団体の提案に応じて、地域団体、学生、教員の三者がチームとしておこなった「丸木位里と故郷飯室をつなぐ」プロジェクトについて報告する。[1]

位里については、赤松俊子（丸木俊）と共に制作した《原爆の図》連作はもとより、近年では画業全体に光を当てる展覧会が開催されるなど、継続的な研究成果の蓄積がある。学術的研究が進展する一方で、地元での位里に対する親しみは、直接つながりがあった人が減るにしたがって感じられにくくなり、作品の保存や記憶の伝承に対する危機感が持たれる状況にあったという。地域の文化的価値を未来へ継承しようとするとき、対象の存在を次世代が知らなければ為す術がない。今回のプロジェクトでは、今後の価値継承への糸口として、位里と飯室のつながりをわかりやすく可視化し、飯室に関わる人々に伝えることに重点を置いた。

本稿ではまず、プロジェクト発足の経緯と調査チームの基本方針について述べる。続いて、地域での調査について、調査中に見出された小さな発見を含めて報告する。最後に、プロジェクトの成果発表としておこなった活動を紹介し、地域での反響や今後の課題を述べる。本報告が、地域文化の保護と価値継承の活動例として参考になれば幸いである。

一．チームの結成と基本方針策定

プロジェクトのはじまりは、地域団体から寄せられた課題であっ

た。提案者は、旧安芸飯室駅の駅舎を拠点に飯室の地域活性化に取り組む団体であり、[2]内容は「安佐町飯室出身の丸木位里さんの作品を通じて、平和について考えるきっかけづくりを行い地元で丸木位里・俊さんに関するマップを作成することで地域活性化につなげる」というものであった。[3]発案の契機は、この団体が活動の一環として四年前からおこなっている《原爆の図》の複製展示にあった。八月六日を含む展示期間中、回を重ねるごとに、位里との交流について話しに来てくれる人や、自分も位里の作品を持っているという人から情報が寄せられるようになった。一方で、位里の作品を所蔵していた方が亡くなり、代替わりした後の方は管理に困って破棄してしまったという話も聞こえてきたという。地域の位里作品を保存するため、まずは第一歩として、地域の作品所在をマップで把握したいとのことであった。

提案を受けて、地域団体、学生、教員の三者でプロジェクトの形を検討した。[4]協議の結果、個人の所蔵情報の取り扱いは極めてデリケートであるため、作品調査は地域の公的な所蔵機関を中心とすること、個人の作品も調査するが所蔵情報は公表しないこと、マップづくりも公的な所蔵機関を中心とし、丸木位里と飯室の関係がわかるスポットを地図上にわかりやすく示すことを基本方針とした。

二．調査

（一）調査概要

調査の方法は、文献調査、作品調査、関係者からの聞き取り調査の三つを柱とした。

文献調査は、学生と教員が中心となり、先行研究から特に飯室に関する情報を抽出して地域団体と共有した。丸木位里については、先述の通り、先行研究による成果の蓄積があり、近年では二〇二〇年に、奥田元宋・小由女美術館ほか二館で「墨は流すもの―丸木位里の宇宙―」展（丸木位里展実行委員会）が開催されるなど、画業全体を捉えることができる。飯室とのかかわりについても、位里自身の述懐や平松俊昭氏による聞き取りに加え、永井明生氏、岡村幸宣氏による研究から、既に多くの知見が明らかにされている。[5]プロジェクトを進める過程で、これらの学術的な研究成果を、一般にアクセスしやすい情報として地域に還元する方法を検討した。また、学術的な成果が地域に吸収されることによって、地元に伝わる記憶から新知見が生まれることへの期待もあった。

作品調査および聞き取り調査は、地域団体が主導して調査先を選定し、アポイントをとり、地域団体と学生、教員の三者が共同でおこなった。地元の信頼関係のもと、短期間に次々と調査日程が決まったことは、プロジェクトの進行上大きな意味をもっていた。[6]

（二）三寺院の襖絵と制作の記憶

位里が飯室で過ごしたのは、一九〇一年の誕生から青年時代までであり、本格的に画家の道に入ったあと、飯室の地にアトリエを構えて制作をし続けたわけではない。[7] しかし、位里にとって飯室が特別な土地であり続けたことは、丸木美術館を現在の所在地に建設することを決めた理由を語る、次のような述懐からも明らかである。

わたしはその川（筆者注：丸木美術館の裏を流れる都幾川）を見たとき、すぐに郷里の太田川を思い浮かべて、ここはいい、川があるからいいと思った。向こう岸の遥か先には低い山があって、その間に農家が二、三軒小さく見えるだけで、付近には家が一軒もない。なんと寂しい所だとは思ったが、わたしの生まれた所によく似ていたから、ここに決めようと思った。[8]

後年、生家跡付近を訪れた際には、上流のダム建設等によって思い出とは様変わりした飯室の自然に落胆し「私が子供のころあそんだ川も、川原も、山も、草原も、全部かわっていいところではなくなっていました」という厳しい言葉を残しているが、[9] それだけ、子供の頃に見ていた原風景としての飯室が、位里にとって大切であったと見ることができるだろう。

位里は頻繁に帰郷していたわけではないが、飯室地域の人々との交流は途絶えなかった。飯室地域の作品所在について特筆すべきことに、飯室三ヶ寺と呼ばれる三寺院の本堂の襖絵が、位里の制作、あるいは位里と俊の共作であることがあげられる。制作年代の順に、丸木家の菩提寺でもある浄國寺の《梅図・雪松図》（一九二六年、現在は屏風装に改装）、先代住職が位里の同級生であったという養専寺の《松竹梅図》《穂高連峰》《瀬戸内海》《不忍池蓮》（一九七五年）、ふたたび浄國寺の《龍虎図》《天女図》（一九九一年、俊と共作）、そして、襖絵としては最晩年の制作となる正念寺の《天女図》（一九九二年、俊と共作）である。浄國寺の《梅図・雪松図》は二四歳のときの制作で、水墨の画家というイメージはまだない。養専寺の《松竹梅図》では、墨の濃淡、刷毛を動かすスピードが自在に操られ、大画面いっぱいに力強くモチーフが構成されている。晩年の浄国寺および正念寺の《天女図》は俊が主導的に制作し、位里らしい筆跡が表現のアクセントとなっている。いずれも、その時々の位里の制作スタイルをよく示す作画である。

このうち養専寺では、制作時に丸木夫妻に対応した森重氏から、当時の思い出を伺った（写真1）。襖はお寺で準備したが、使う紙に位里の指示があったこと、日中は次々に知り合いが訪れ、夜中に制作していたこと、位里の好物のことなど、このとき伺ったエピソードはチームにとって、この地でたしかに活動していた「位里さん」を感じる貴重な機会となった。

写真１　制作時の話を伺う（養専寺にて）

各寺院の襖絵調査後、地域団体の方から、檀家でなければ同じ地域でも襖絵を見る機会はなかなかない、今回同行して学生と一緒に絵を見られてよかったという話を伺った。一方の学生にとっては、飯室を訪れる前、丸木位里の名は、《原爆の図》の画家として、遠い歴史的事項のなかにあるものであった。実際に関わりのあった方から聞き取りを重ねるにつれ、チーム全員が、位里の活動と現在の飯室の連続性を実感した。

各寺院の襖絵が現役で使用されていることも、位里の制作を現在と結ぶ上で大きな意味をもっていた。筆者が亡くなった後も、襖絵は人が集う場にあり続ける。位里は、自ら手掛けた襖絵が長く地元の人々の目に触れ続けることを意識していたであろう。空間を演出する襖絵の機能は、場が生きていなければ感じられるものではない。個人宅の調査においても、美術館のようにガラスケースの中ではなく、作品が生活の中にあることが、飯室で生き続ける位里を感じる手掛かりとなった。

（三）門柱の文字

飯室に残る位里の活動の跡について、先行研究の情報を整理しているとき、位里の証言に気になる箇所があった。少し長くなるが、該当部分を引用する。

その昔、村の青年団におってぶらぶらしとる頃に、村の石屋さんから「恵比寿様が祭ってあるお宮の門柱を建てるから、正面に大きな字を書いてくれんか」と頼まれたことがあった。そのことを思い出したもんだから、宇津のお宮まで行ってみることにした。その字を見付けてつくづく懐かしく思った。その頃は石屋に友達がおったので、よくそこへ遊びに行ってたんだ。「お前は字がうまいから、ひとつ……」とおやじさんに言われて、わたしもその気になって書いたに違いない。いたずらで、ずいぶん嫌われながら村におった時代に書いたその門柱と、近頃書いた小学校の記念碑は、いつまでもわたしの村に残ることだろう。[10]

ここで位里は、若いときに門柱に、そして最近になって小学校の記念碑のために、頼まれて字を書いたことを述べ、そのふたつは将来も飯室に残るはずだと語る。小学校の記念碑とは、一九七五年、百年祭のため広島市立飯室小学校に贈られた「誠心」の二字のこと

であり、現在も飯室小学校の校庭に建つ。しかしながら、「宇津のお宮」の門柱については、所在が明らかにされていなかった。別の文献には、平松俊昭氏のインタビューに答える位里の回想として、同様の石屋に頼まれたエピソードが紹介され「文句は忘れたが、四つも五つも」文字があったこと、いくつぐらいのときに書いたのかという質問に対して「年号を書いてないからわからんが……」とこたわった上で「まあ、十代だね、やっぱり。まだ兵隊検査前だ」[11]と答えている。

これらの資料を提示し、地域団体の方たちに、「恵比寿様が祭ってあるお宮」「宇津のお宮」「門柱に大きな字」「文字は四つ、五つ」といった条件に合うお宮がないか尋ねてみた。すると、門柱があったかは定かではないが、宇津には確かに恵比寿さんをまつった社があるという。早速チームで調査に行くと、加計街道から少し入った場所に小さなお宮があり、そこには大きな文字が刻まれた門柱があった[12]（写真２）。

写真２　胡社（恵比寿神社）門柱

右側の柱には「信戸享千寿」、左側の柱には「笑門来萬福」と大書され、側面を見ると「大正十二年十二月建立」とある。大正十二年十二月といえば、上京して一時的に田中頼璋のもとで学んでいた位里が、九月の関東大震災を機に帰郷していた時期にあたる。年齢は二二歳。位里の回想に出てくる「兵隊検査」が大正九年であるため誤差があるが、位里の証言は書いた時期をはっきり覚えていないとことわった上でのものであり、許容範囲のずれと見てよいのではないだろうか。他の条件が全て適合し、回想との年代差が三年以内であることから、ここが位里の思い出の門柱としてよいと考えられる。お宮の周りに建てられた、寄進者の名が入った柵の中には、位里の父・丸木金助の名前があり、聞き取り調査でご協力いただいた方々の関係者の名前も多く見られた。

（四）文化施設ロビーの襖絵

調査が中盤に入った頃、飯室から少し離れた安佐北区民文化センターにも位里の絵があるという情報が、地域団体の方からもたらされた。センターを訪れたところ、エントランスロビーにガラスケースがあり、その中に襖四面が展示されていた（写真３）。柔らかいフォルムで示された幹が四面いっぱいに広がる梅図である。向かって右より一面目の右下に「一九八三年初秋／八十二才／位里」と署名され、朱文方印「位里」が捺される。描線の運びに見られる即興的な表現の特徴に加え、襖の下部に貼られた腰紙の上にも描線が

（上）写真３　丸木位里《梅図》（安佐北区民文化センター）
（右下）写真４　腰紙の上に描線が載る（写真３部分）
（左下）写真５　引手部分を避けて描く（写真３部分）

載っていること（写真４）、描線が引手部分を避けていることから（写真５）、事前の依頼に応じたものではなく、建物に既に嵌まっていた襖を利用して描かれたものではないかと推測された。それを裏付けるように、位里と交流のあった方から、これらの襖絵はかつてセンター内の和室にあったという証言を得た。襖絵に記された制作年は、安佐北区民文化センターの建物竣工の年と一致する。また、この竣工の年の秋には、センターで地元の絵画・彫刻展が開催され、位里も出品している[13]。新しい建物への祝意をこめて、このときに描いたのではないかと想像がふくらんだ。襖の傍にはキャプションが付され、丸木位里に関する説明があるが、襖の展示に至った経緯は不詳であった。そこで、センターから紹介のあった広島市地域起こし推進課の助言を得て、当時の施設管理者である広島市文化財団に問い合わせることとした。

並行して資料を探した結果、二〇一三年に、当時のセンター職員から襖絵の所蔵経緯を聞いたというウェブサイト記事に行きあたった。記事の正誤や典拠を含めて、広島市文化財団に問い合わせたところ、二〇一三年当時の職員の方の確認がとれた。その結果、広島市文化財団が安佐北区民文化センターの施設管理を行っていた際、来館者の質問対応等用に作成したと思われるメモに、襖の所蔵に関する詳しい経緯が記されていたことが判明した。メモの要点は以下の通りである。

・昭和五八年度に「地元美術家絵画・彫刻展」が開催された際、地元安佐町出身の丸木位里氏の作品を特別展示し、オープニングセレモニーに招待した。
・このとき、和室で休息していた位里が、襖に松竹梅の絵を描いた。
・その後、平成四年二月まで和室の襖として使用していたが、和室使用時に襖絵が傷つくことを防ぐため、保存方策を講じることとした。
・地元の有識者（可部ライオンズクラブ）より、区の財産として保存したい旨の申し出があった。
・区民に常時鑑賞出来るようガラスケースに保管し、ロビーへ展示している。

あわせて、現在展示されている梅が描かれた面の反対面にも竹の絵があり、かつては定期的に表裏の展示替えをしていたということもご教示いただいた。

かつて所蔵機関で共有されていた作品情報が、短期間のうちに埋もれかけていたというこの事例から、地域の文化価値を長期的に継承していく上での課題が見える。公共施設に指定管理者制度が適用されるという事情もあり、今後も持続的な情報の継承、管理が難しくなることは避けがたい。そうであればなおのこと、地域で文化資産を継承する住民の意思が、将来的に作品を守る力として必要になることを再認識した。

三．成果発表

（一）講演会とパネル展示

先述の通り、学術的な研究成果の地域への還元と、その結果地域から生まれる新知見への期待が、今回のプロジェクトの目的のひとつであった。地元での丸木位里に対する再認識を促し記憶を掘り起こすため、専門研究者の話を聞く機会として、飯室に所在する安佐公民館での講演会を企画した。安佐公民館との連携は地域団体が主体となってはかり、公民館の主催事業として開催されることになった。講師は原爆の図丸木美術館専務理事・学芸員の岡村幸宣氏に依頼した。講演会周知のためのチラシは学生がデザインし（写真６）、公民館、文化センター、地元の小中学校など関係諸機関に送付し

写真６　学生が制作したちらし

た。また、講演会にあわせて、調査の結果を発表するパネル展示を、学生が中心となって企画した。

講演会は十二月十八日におこなわれた。定員五〇名、事前予約制で参加希望を募ったところ、開催一週間前には定員に達し、予想以上に高い関心が窺われた。「丸木位里の原風景」と題された講演は、位里と交流のあった方や研究者など、会場との応答を織り交ぜつつ進められ、熱心に耳を傾け大きくうなずく参加者の反応が印象的であった。岡村氏は、位里の活動に加え、位里に大きな刺激を与えた同時期、同郷の芸術家たちに言及し、飯室という地域から芸術家が多く輩出されている特異性を指摘した。画家にはならなかったものの位里が画家を志すきっかけを与え、よき理解者であった中丸雪生の存在や、ほぼ同級の洋画家・中谷ミユキ、八歳年下の日本画家・佐々木邦彦らが取り上げられ、位里との関係や、飯室に残る作品の一部が紹介された。講演会参加者の四分の一は飯室の居住者であり、地域が保持する文化的価値を再認識する機会となったのではないだろうか。講演後のアンケートでは、飯室に育ったが、出身の芸術家たちについて何も知らず育ってきたので、今の小学生達、中学生達には知る機会をもってほしいという意見が寄せられた。

講演会にあわせて公民館ロビーでおこなったパネルの展示期間は、当初、講演会当日のみを予定していたが、公民館の厚意により二七日まで延長された。制作した学生間の話し合いで、パネルでは丸木位里の画業全体を紹介するのではなく飯室に特化した内容とし、「飯室の位里さん」として身近に感じられることに主眼を置いた。教育学部造形芸術系コースの学生である特性を生かし、イラストを多く加える、位里の画技を知るため学生が水墨画に挑戦した結果を展示するなど、親しみをもって見られる内容を心掛けた（写真7）。寄せられた反応のなかで特に学生たちを喜ばせたのは、地元の学校図書館司書の方から寄せられた「わかりやすくまとめられているので、子供たちに伝えるために、今回の展示資料を活用したい」というコメントであった。

写真７　講演会の様子（安佐公民館大集会室）

写真８　パネル展示の準備（安佐公民館ロビー）

（二）マップ、小冊子の作成

プロジェクトの最後に、飯室地域における位里の活動が確認でき

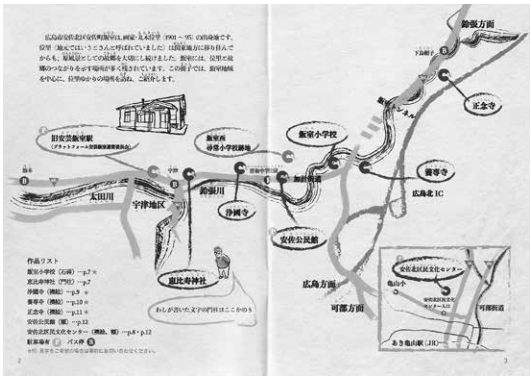

写真９　小冊子表紙とマップ頁

る地点を表すマップを作成した。そして、マップと、パネル展示に増補した内容をあわせ、飯室と位里の関係をまとめた小冊子（写真８）を作成した。マップおよび小冊子の制作は学生が担当し、地域団体の方々の意見を聞きながら編集を進めた。パネル展示の際の反応を踏まえ、小学校高学年以上が読むことを想定してふりがなを多くふり、手にとってもらいやすく読みやすい構成を意識した。

　完成した小冊子は、安佐公民館、飯室小学校、飯室三ヶ寺など関係各所のほか、平和記念資料館に届けた。地域内では、公民館から地域住民へ、小学校から児童や保護者へ、寺院から檀家へなど、地域の拠点からそれぞれ配布が予定されている。また、地域外に「丸木位里の故郷・飯室」を発信する手立てとしても、小冊子が活用されることを期待している。地域内外への関心の高まりが、新たな情報提供につながれば、飯室と位里のつながりがさらに深まっていくだろう。

おわりに

　今回のプロジェクトでは飯室地域の主要作品調査に留まり、今後の作品保存に対して何か具体的な方策や仕組みを示せたわけでもない。しかしながら、地域と学生が協働したことによって、飯室という地域が画家・丸木位里を生み、位里にとって飯室が生涯大切な場所であったことを再認識する機会になったのではないだろうか。調査の過程では、自分の後の代に作品を残す手立てがないという声を複数箇所で耳にした。次の世代に継承するため、地域住民が文化的価値に対する共有認識を持てるような取り組みを進める必要性があることを強く感じている。プロジェクトをまとめた小冊子配布後、地域団体のもとには新たな情報が届いていると聞く。関心の高まりを将来的な作品保存へとつなげるため、今後も地域と学生を巻き込んだ情報交換や作品調査を継続し、講演会や展示企画など地域住民の目に触れやすいかたちでの情報発信に協力するなど、取り組みを

続けていきたい。

飯室に残る位里の足跡は、画家として立とうとした若き時代の筆跡を伝える恵比寿社の門柱や、菩提寺・浄國寺での襖絵制作（現屏風装《梅図・雪松図》）、名を成して故郷に迎えられた飯室小学校の石碑への揮毫や養専寺の襖絵制作、そして晩年の境地を示す浄國寺や正念寺の襖絵制作と、《原爆の図》や《沖縄戦の図》をはじめ妻・俊と取り組んだ一連の作品群を挟み込むように存在する。故郷での作品保存は、これら一連の画業を見通す上で大きな意味をもつであろう。また、地域団体から当初提示された課題に即して言えば、飯室での制作と《原爆の図》をはじめとする制作を包括的に捉える視点をもつことが、「位里の作品を通じ平和について考えるきっかけづくり」になり、今後の作品保存につながっていく。

最後に、今回のプロジェクトにあたっては、学生が地域の方々に歓迎され、あたたかく迎えていただいた。ご協力いただいた飯室地域の方々に、記して厚く御礼を申し上げたい。

（たたら・たきこ／広島大学）

註

（1）プロジェクトの実施期間は二〇二一年八月から翌年三月にかけてである。プロジェクトについては「原爆の図丸木美術館ニュース」第一四八号（原爆の図丸木美術館、二〇二二年一月一五日発行）でも概要を報告した。

（2）プラットフォーム安芸飯室運営委員会。二〇〇三年十二月に廃止となったＪＲ可部線（可部―三段峡間）の廃線敷の一部や、一九三六年に建設されたという木造の旧安芸飯室駅駅舎を、区役所と管理協定を締結し、その保存、活用に取り組んでいる団体。

（3）広島大学では、地域社会で課題の解決に取り組んでいる団体から提案を受け、学内の教員、学生と地域団体の協議の上で、調査・研究活動や実践活動に取り組む「地域の元気応援プロジェクト」が実施されている。本プロジェクトは、その採択事業のひとつとして実行された。詳細はhttps://www.hiroshima-u.ac.jp/iagcc/ccc/ccc2（2022/3/2閲覧）

（4）地域団体からは三名が中心になり、大学からは学生六名が有志として参加し、教員を加えて総勢十名のチームで活動した。

（5）永井明生「したたかに、奔放に―丸木位里の生涯と作品」『墨は流すもの―丸木位里の宇宙―』（丸木位里展実行委員会、二〇二〇年）、岡村幸宣『未来へ　原爆の図丸木美術館学芸員作業日誌二〇一一―二〇一六』（新宿書房、二〇二〇年）ほか。プロジェクトを進める上で、永井氏、岡村氏の大きなご支援、ご助言をいただいた。深く感謝を申し上げる。

（6）八月三〇日から十一月二五日までの期間に七度飯室を訪れ、のべ十六地点で調査をおこなった。

（7）永井前掲註5。

（8）『丸木位里画文集　流々遍歴』岩波書店、一九八八年、九〇頁。

（9）丸木位里「思うままに」『飯室小学校百年誌』、一九七五年、一一八・一一九頁。

（10）前掲註8、一五一頁。

（11）平松利昭編『閃きの芸術・流々人生　丸木位里・俊の遺言』樹芸書房、二〇〇二年、三二頁。

（12）飯室地域の胡社は宇津と古市にあり、宇津胡社は〇・七坪、古市胡社は固定されたものではなく、お祭り当日以外は伊勢神社の社殿に安置されているという（「郷土の神社」『飯室小学校百年誌』、一九七五年、二三四頁）。飯室地域で門柱を有する胡社としてはやはり宇津のお宮が該当することになるであろう。

（13）広島市安佐北区民文化センター編『地元芸術家絵画・彫刻展』広島市安佐北区民文化センター、一九八三年。